

●台湾日語教育學會2015年度國際學術シンポジウム

(2015年11月28日, 台湾: 台北)

報告者: 頼 錦雀 (東呉大学, 主催者)

台湾日語教育學會 2015 年度會員大会及び國際學術シンポジウムがさる 11 月 28 日に会長校の東呉大学で開催された。「学習者主体の日本語教育の再考」をメインテーマに、台湾国内外から 199 名 (日本から 24 名, 韓国から 4 名, 中国から 2 名を含む) の研究者の出席のもと, 5 つの基調講演, 3 つの招待発表, 15 の一般発表, 6 つのポスター発表が行われた。

大会は東呉大学教授・当学会理事長頼錦雀の開会挨拶のあと, 公益財団法人交流協会台北事務所浜田隆部長のご挨拶を頂いてから始まった。基調講演では, 日本国際交流基金日本語国際センター西原鈴子所長は, 日本における日本語教育に関する日本語研究, 習得研究, 社会文化的研究, 教師研究の 4 つの研究領域を基幹としつつ, 「わかる」から「できる」へという, 最近の新しい目的意識と学習観に基づいた教育実践についての考察を行った。一橋大学国際教育センター庵功雄教授はまず, 現行の文法シラバスの問題点を指摘してから, 「英語シフト」の波における日本の大学留学生センターの対策として, 初級から上級までを見通した文法シラバス, 産出レベルを中心とする文法シラバスなど, 新しい文法シラバスに基づく留学生日本語教育の枠組みに関する私案を提示した。韓国日語教育学会副会長・韓国培材大学校基礎教養教育部趙宣映副教授は韓国の大学における日本文化の理解を重視する教養日本語科目の現況を紹介し, 具体例として「学習者主導の学習」に関する韓国の日本語教師の工夫を説明して, 教養日本語が単なる外国語学習ではなく, 「教養」科目としての地位を築いていくべきだと提言した。韓国日語日文学会会長・韓国外国語大学校日本語大学文明載教授は「有難う」「将棋をさす」「家をつぐ」という表現を例に, 日本語表現の成立過程とその文化的背景を説明し, 日本文学は日本文化を究明し, それを教育に結び付けられる有効な手がかりを提供してくれるものだと述べた。そして, 台湾国立高雄第一科技大学外国語学院長・応用日語系葉淑華教授はインターネットを介した e ラーニングの変遷や学習理論について概観し, e ラーニング教材の多様な発展形態を紹介してから, 自作した e ラーニング事例を紹介した。「学習者主体の日本語教育の再考」において日本語学, 日本文学, 日本文化を含めた日本語教育学の研究が必要であり, それぞれの基調講演の内容が今後の台湾における日本語教育の発展に貴重な示唆を与えてくださった。

一般発表及びポスター発表は日本語教育学, 日本語学, 日本文学に関する研究成果であった。教師や大学院生による発表を通じて, 台湾国内外の日本語教育の学术交流に花を咲かせた, 充実したシンポジウムであった。閉会式のあと, 懇親会が行われたが, その会場でも「学習者主体の日本語教育の再考」についての熱意あふれる意見交換が行われた。

当学会の年度大会及び國際シンポジウムは台湾最大規模の日本語教育関係者の集いであり, 日本語教育に大きく寄与するものでもあることから, 毎年, 開催されている。2016 年度は 11 月 26 日に東呉大学において開催する予定である。詳細は台湾日語教育學會ホームページ (<http://www.taiwanjapanese.url.tw/>) を参照されたい。